# 免疫チェックポイント阻害剤が著効した Virchow リンパ節転移消化器癌の２症例

中川　大佑　、清水　将来、　田上　修司、　木許　健生
（　大阪府済生会茨木病院　外科　）

【1 例目】
57 歳男性、胃の圧迫感を主訴に前医受診。精査の結果、胃癌と領域リンパ節腫大に加え、傍大動脈リンパ節と左鎖骨上窩リンパ節の腫大も認めたため、cStageⅣB の診断で抗癌剤治療開始。S-1+CDDP を５クール施行後、PD で XELOX＋Nivo 開始。傍大動脈リンパ節と Virchow リンパ節は縮小を認めたものの、７クール後に AE のため Nivo 単剤に変更し、計 38 クール施行した。その後、胃全摘術 D2 郭清を行ったが、病理検査でリンパ節への転移は認められなかった(ypN0)。現在、術後に Nivo 単独を継続しているが、７クール施行時点で明らかな再発は認めていない。

【2 例目】
68 歳女性、食欲低下と右下腹部痛の訴えあり。精査の結果、上行結腸癌と領域リンパ節転移に加え、肝転移、腹膜転移、傍大動脈リンパ節腫大、左鎖骨上窩リンパ節腫大を認め、cStageⅣc の診断で抗がん剤治療開始。mFOLFOX6 を１クール後、Pembro を計６クール施行。PR の診断であったが、腫瘍穿孔をきたしたために右半結腸切除を行ったが、病理結果から腫瘍本体も含め癌遺残は認めなった。その後、Pembro を継続していたが。３コース終了時点で抗 PD-L1 抗体による間質性膀胱炎を併発したため中止。中止後 2 ヵ月経過しているが、現時点で明らかな再発は認めない。

文献的考察も踏まえ、免疫チェックポイント阻害剤が著効した Virchow リンパ節転移消化器癌の症例を報告する。